

# HOT PEOPLE

## 3 フランスの俳優 ジャン・レノさんが笠間に来訪

12/6

俳優のジャン・レノさんが、笠間日動美術館を訪れました。ジャン・レノさんは、12月5日に都内で行われた社会貢献活動を軸としたチャリティーイベントに参加するために来日。笠間には、観光で来訪されました。

美術館では、長谷川智恵子副館長の解説を聞きながら作品を鑑賞していました。

写真の撮影にも快く応じてくれて、とても気さくな方でした。



(写真中央) 作品を鑑賞するジャン・レノさん

## 1 「シルバーリハビリ体操3級 指導士」13名を養成

11/11

シルバーリハビリ体操3級指導士養成講座が行われ、1級指導士の協力のもと新たに13名の3級指導士が養成されました。

シルバーリハビリ体操は、誰もが気軽に通える地域の公民館などで、介護予防や認知機能の向上を目的として、指導士を中心に実施しています。みなさん、ぜひシルバーリハビリ体操教室にご参加ください。



1級指導士と受講者の皆さん

## 4 笠間中生徒が シトラスリボンを配布

12/4

茨城BACK BONEのホームゲームが行われた道の駅かさまで、笠間中学校の生徒の皆さんがシトラスリボンを配布しました。

シトラスリボンとは、コロナ禍による差別や偏見をなくすための象徴。

リボンは、総合的な学習の時間に全校生徒が、これからの未来が明るいものになるようお願いを込めて作成しました。



道の駅かさまの来場者に配布しました

## 2 茨城BACK BONEの 公式戦を開催

12/4

東京2020オリンピックの公式種目となった3人制バスケットボールのプロリーグ「3×3 S LEAGUE」のラウンド12(公式戦)が、道の駅かさまで行われました。

県内には茨城ロボッツと茨城BACK BONEの2チームのプロバスケットボールチームがありますが、3人制の茨城BACK BONEは初のホームゲーム開催となりました。

スピード感あふれる3人制バスケの迫力あるゲームが、道の駅かさまを訪れた観光客の注目を集めていました。



茨城BACK BONEの試合の様子  
(茨城BACK BONEの選手は写真左)

## 7 笠間台湾交流事務所が 表彰を受けました

12/20

笠間台湾交流事務所が台湾の行政院農業委員会農糧署（日本の農林水産省に相当）から表彰を受けました。

市では2019年に農糧署と「食を通じた文化交流と発展的な連携強化に関する覚書」を締結し、学校給食へ台湾産果物の提供を行ってきました。

その取り組みは、県内の複数の自治体に参加するまでに拡大し、市内スーパーで台湾の果物を販売するなど、日本における台湾産果物の知名度向上や販路拡大への貢献が評価され、今回で4度目の受賞となりました。



(左から) 行政院農業委員会農糧署 胡署長、  
笠間台湾交流事務所 木下さん

## 5 年始に向けて 門前通りを大掃除

12/15

笠間稲荷神社への初詣客を気持ちよくお出迎えするため、笠間稲荷門前通りの商店の皆さんが、通りの清掃を行いました。

水を撒きながら、デッキブラシで石畳の道路をゴシゴシと清掃し、通りはとってもきれいになりました。



清掃する笠間稲荷門前通りの商店の皆さん

## 8 県民駅伝で 笠間市役所チームが3位

12/10

第39回茨城県民駅伝競走大会が笠松運動公園陸上競技場（水戸信用金庫スタジアム）内の周回コースで開催され、笠間市からは、職域対抗の部に笠間市役所チームと笠間市消防本部チーム、市町村対抗の部には選抜された選手で構成された笠間市チームが出場。

職域対抗の部では、チームワークを発揮した市役所チームが堂々の3位。市消防本部チームも5位となりW入賞を果たしました。



職域対抗の部3位の笠間市役所チーム

## 6 常磐大学生との 市政懇談会を開催

12/12

常磐大学で、市長と学生が笠間について語り合う市政懇談会を開催しました。

当日は行政に関心のある常磐大学生20名が参加し、学生の視点からさまざまな課題について、市長と話し合いました。いただいた意見は、今後の市政に活かしていきたいと思えます。

学生の皆さん、ありがとうございました。



市政懇談会に参加した常磐大学生の皆さん



## 9 宍戸小学校にイルミネーションが飾られました

12/30

宍戸小学校が令和5年度に創立150周年を迎えることから、「宍戸おやじの会」の皆さんによりイルミネーションが学校に飾られました。

コロナ禍であっても、地域に癒しと活力をもたらし、子どもたちにも心身ともに健康に成長してほしいという思いを込めて設置したとのことです（設置期間：12月30日～1月8日）。



イルミネーションを準備する「宍戸おやじの会」の皆さん

### スポット ライト!

### 昭和初期の陶芸家「塙彰堂」

今回、笠間焼250年を記念するとともに、日本遺産「かさましこ」のストーリーの軸である笠間焼にフォーカスし、歴史的な観点から陶芸家としての輝かしい受賞歴と功績を持つ、昭和初期を生きた「陶芸家・塙彰堂」にスポットライトを当てます。



塙彰堂（本名塙好）は、明治30年12月、西茨城郡大原村（旧友部町）で生まれ、笠間の西茨城第一高等小学校を卒業した後、窯業の仕事を目指し、西茨城郡立笠間陶器伝習所に入所しました。その後、来栖陶器合資会社などを経て、大正7年、西茨城郡所より母校でもある郡立笠間陶器伝習所の技術員の嘱託を受け、陶工を目指す人を指導しながら、自らも陶芸をより高い美術品にするため築窯し、研究に励みました。

大正12年、元の郡立工業講習所跡の窯をゆずり受けて独立し、制作にあたりました。その頃、陶芸家である板谷波山の門下生となり、陶号を「好山」としました。

昭和5年、笠間焼陶器品評会で3等賞を受賞。この作品から、笠間焼は美術品として脱皮し、その後の発展につながることを示唆したものとなりました。

昭和9年、第3回茨城工芸展で県賞を受賞。昭和10年には第97回日本美術協会展で銅賞を受賞しました。この協会には、県内陶芸家の中で波山のほかに入選者がいなかったため、「波山に次ぐ陶芸家の誕生」と高い評価と注目を集めました。

昭和17年、第7回茨城工芸展で再び県賞を受け、昭和18年、第6回新文展で「彰堂」と号して初入選。これは、笠間の土を使った作品で、いはらき新聞等がその快挙を報じました。昭和21年、日展となって第1回展が開催され、再び入選しました。

その後、波山の指導のもと新たに窯を築き（桜窯）、いよいよ本格的な築窯製品を出そうとした矢先、昭和22年1月、49歳で急死しました。

孫の塙章一さんによると、窯に焼き物をセットし火入れをする直前に、志半ばで亡くなったそうです。その無念を晴らすため、作業を引き継ぎ、窯に火を入れ焼き上げ、思いをつないでくれた同志がいたと言います。

章一さんは、「彰堂は、生前にたくさんの人とのつながりや支援があったからこそ、数々の栄誉を手にすることができたし、中でも、地域の人を育てる気風の後押しされて、頑張ることができたと思います」と話してくれました。

彰堂の受賞は、焼き物を通して人と人との思いをつないでできた彰堂の感謝の賜物なのかもしれません。

参考文献：笠間市史(下巻)



てつゆうがんりんちやいれ  
鉄釉文琳茶入



かえるれんようしよくだい  
蛙蓮葉燭台